32

春をつげるイースター（復活祭）

御堂筋ものがたり

絵・文　熱田親憙

市民らを大事にする精神

「浪花教会で、3月23日がイースターと掲示されていたけど、知ってた？」「そうよ。イースターは毎年日が変わるのよ」「ところで、イースターにはなぜ色のついたゆで卵をつくるの？恒例だね」「イースターエッグと言って、イエスの復活を祝う意味を表しているの。ヒナが卵から生まれることをイエスがよみがえって復活されたことを結びつけたもの、さらに春になって草木に生命がよみがえる喜びをも表しているといわれているわ。これ以上は牧師さんに聞いて」「それと梅花高校のPRポスターが掲示されていたけど、どんな関係？」「確か明治初期にどこかの教会と合同で梅花女学校を設立したと記憶しているけど…」「なかなか筋金入りの教会だね。明日、牧師に取材してみるかな」

運良く担当牧師に会えて以下の新発見ができた。同教会の初代牧師、澤山保羅（パウロ、本名は馬之進）は長州藩の下級武士の子息で、神戸でキリスト教と出会った。アメリカ留学後、松村診療所内に浪花公会（教会）を設立し、1877年、日本人として初めての按手礼（牧師になる儀式）を受けて初代牧師となった。翌78年、梅本町教会（現大阪教会）と浪花教会の信者たちの寄付で梅花女学校を設立し、女子教育の充実を目指した。79年には天満教会を設立。彼らの手がけた教会も学校も、役所やミッション団体からの援助を断り、自力で運営する自給教会・学校であったという。

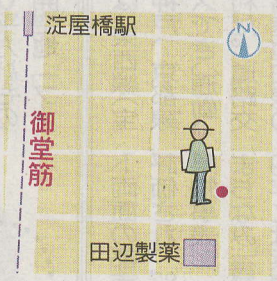
誰にも拘束されず、信者や町民を大事にする精神は、今の村山盛芳牧師にも受け継がれ、信者ではないビジネスマンやOLのために1階ホールを憩いスペースとして提供している。毎週木曜日には正午礼拝と銘打って、2階礼拝堂でメッセージとパイプオルガンを聴く会も催されている。

これもビジネスエリアにある教会の役目の一つだと牧師は言う。船場は多くの人々が出入りする環境にあるので、市民のためのコミュニティープラザとしての役割も期待したいところである。

船場のビル街に降る小雨に春の訪れを感じながら、「大阪都心の魅力再生シンポジウム」の会場に2日間通った。船場・御堂筋の新しいまちづくりのあり方を考えるのが開催趣旨だ。これまで分散されていた情報が大分体系的にまとまってきたので、すっきりした。

会場を辞して三休橋筋を北に歩いて行くと、高麗橋2丁目角にモダン建築、赤レンガのフランス料理店シェ・ワダ（閉店中）とステンドグラスの大窓をもつ「浪花教会」が目に入った。教会の掲示板には「3月23日（日）イースター礼拝」とあり、結婚当初の教会ライフが思い出された。

牧師家庭に育った家内は、イースターの聖日礼拝には子供を連れ、必ず何色ものゆで卵をたくさん作って持参していた。教会の植え込みで、私もゆで卵さがしのゲームを子供たちと共に興じたものだ。帰宅して家内にたずねた。



メモ　現在の教会ビルは1930年、宣教師で建築家でもあるヴォーリスの指導で、竹中工務店が設計・施工した。礼拝堂の両窓はステンドグラスとなっている。